

次回のご案内

第36回肝類洞壁細胞研究会学術集会

開催日：2022年12月9日(金)、12月10日(土)

会 場：奈良ホテル

テーマ：肝類洞壁研究の未来予想図

当 番 世 話 人：吉治 仁志

奈良県立医科大学 消化器・代謝内科 教授

〒634-8521 奈良県橿原市四条町840番地

電話：075-231-6357 FAX：075-231-6354

E-mail：hsrj36@c-linkage.co.jp

問い合わせ先：第36回肝類洞壁細胞研究会運営事務局

E-mail：hsrj36@c-linkage.co.jp



ご挨拶

第36回肝類洞壁細胞研究会学術集会

当番世話人

奈良県立医科大学 消化器・代謝内科

教授 吉治 仁志

このたび、第36回肝類洞壁細胞研究会学術集会を2022年(令和4年)12月9日(金)・10日(土)に奈良市・奈良ホテルで開催することになりました。奈良での開催は1987年の本研究会発足以来初めてとなります。長い歴史と伝統のある第36回を担当させていただきますことを教室員共々大変光栄に存じます。

本研究会が開催された1987年は、折しも私が医学部を卒業した年になります。私自身この35年間で肝類洞壁研究を含めた肝臓病学が大きく変貌したことを肌で感じています。肝炎ウイルスに対する治療は著しく進歩しており、HCVは非代償性肝硬変を含めてほとんどの症例でウイルス排除が可能となり、肝予備能改善や肝発癌抑制が報告されています。HBVに関しても、核酸アナログにより高率に肝細胞障害のコントロールが可能となっています。一方で、近年アルコールやNASHを中心とした非ウイルス性肝疾患が我が国でも経年的に増加しており、最近ではMAFLDの概念も提唱されています。肝類洞壁を含む非実質細胞は、様々な形で炎症、線維化、脂肪化、癌化などの病態に深く関わっており、解明すべき病態や、診断・治療など残された課題が多く残されています。特に増加傾向にある脂肪性肝炎の病態解明や治療、また肝再生医療の面でも類洞壁細胞研究が一層注目されているところです。

このような背景のもと、今回のテーマを「肝類洞壁研究の未来予想図」とさせていただきます。古都奈良から今後の肝類洞壁研究の方向性を探り、多くの肝疾患患者の予後改善へと繋がる未来へ向けた新しい研究の息吹が感じられる学術集会になることを期待しています。

コロナの状況にもよりますが、基本的に現地での開催を予定しています。奈良市へのアクセスは京都、大阪から30分、伊丹空港から約50分です。日本最古の都である奈良には多くの歴史建造物があります。会場の奈良ホテルは、明治42年の創業以来100年の歴史と伝統のあるホテルで、皇族の方々やアインシュタイン、ヘレンケラーも宿泊した日本建築の良さを感じることができる名門ホテルです。野生の鹿(古来から奈良では鹿は神の使者と考えられています)が多く憩う奈良公園に隣接しており、目の前には興福寺があり、東大寺、春日大社も徒歩圏内です。薬師寺や唐招提寺も30分以内で移動可能ですので研究会後に古都散策も楽しんで頂ければ幸いです。

年末の多忙な時期ですが、志を同じくする研究者との忘年会を兼ねて多数の演題応募および学術集会への参加を心よりお待ちしております。

SINUSOID
NEWS

Vol.20

肝類洞壁細胞研究会

2022.4

特集

第35 回肝類洞壁細胞研究会学術集会

当番世話人からのご挨拶

新潟大学大学院医歯学総合研究科 消化器内科学分野 教授 寺井 崇二

「第 35 回肝類洞壁細胞研究会に参加して」

順天堂大学大学院医学研究科 消化器内科学

教授・消化器内科チェアパーソン 池嶋 健一

「第 35 回肝類洞壁細胞研究会に参加して」

大阪大学大学院医学系研究科 学内講師 足田 隼人

「第 35 回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加して」

大阪公立大学大学院医学研究科 機能細胞形態学講座 助教 湯浅 秀人

「第 35 回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加して」

大阪公立大学大学院医学研究科 肝胆膵病態内科学 大学院生 翁 良徳





第35回肝類洞壁細胞研究会学術集会 当番世話人
新潟大学大学院医歯学総合研究科 消化器内科学分野
教授 寺井 崇二

この度、第35回 肝類洞壁細胞研究会 学術集会を2021年12月16日(木)、17日(金)の2日間に渡り、朱鷺メッセ(新潟コンベンションセンター)において開催させて頂きました。今回は『肝類洞壁細胞のエコシステム』をテーマに掲げまして、未来に継続的に発展する研究会を目指し、肝臓研究の最先端を走る著名な先生方のご講演や、若手研究者セッション9題を含む25演題など、充実したプログラムを構成することができました。お陰様で、現地参加者65名、WEB参加者35名の100名の先生のご参加を頂き、盛会のうちに幕を閉じることができました。

特別講演の仁科博史先生には、肝臓の形成に重要な遺伝子、それを紐解くためのこれまでの研究過程、YAPの発見と細胞増殖への関与と、細胞競合による恒常性維持、治療への応用のための知見についてご講演を頂きました。最先端の研究内容のみにとどまらず、解析手法含め多くを学ばせて頂くとともに、研究の楽しさを改めて実感しました次第です。

また、1日目のイブニングセミナーではDetlef Schuppan先生に「NASH and liver fibrosis: From mechanism to novel therapies and biomarkers」と題したWEB講演を、ドイツより頂戴しました。線維化における collagen の種類とその意義、NASHのメカニズムから肝線維化治療

の開発、そして臨床試験に及びbench to bedsideの最新の知見を発表頂き、深いディスカッションがなされました。

新企画の技術紹介セッションでは、新潟大学の4名の基礎系教授をお招きしました。電子顕微鏡を用いた最先端イメージング技術、リンパ管形成を制御する血管由来因子の研究、ミトコンドリアオートファジー研究、次世代型定量プロテオミクス解析など、最先端の解析手法・技術を紹介頂き、肝臓研究への導入の可能性について共有することができました。さらに、企業協賛セミナーでは、肝臓分野において日本を代表する先生方に様々な視点でのご講演を賜りました。

基礎から臨床までを俯瞰し、かつ各領域の知見を深めることができた2日間ではなかったでしょうか。ご参加頂きました皆様にも有意義な年次集会だったと感じて頂けているようでしたら幸いです。若手の先生方も新たな視点での若々しい発表をされており、今後のさらなる飛躍を期待しております。

今後も本研究会から、肝臓領域における新たな知見が生まれ、各先生方が益々発展されることを祈念しまして、挨拶とさせて頂きます。末筆ながら、参加して頂きました先生方、会員の皆様、協賛企業の皆様、運営にご尽力くださったスタッフの皆様に深謝申し上げます。



コロナ禍にも関わらず多くの先生方にご来場頂き、ありがとうございました



若手研究者セッション 表彰式にて



集合写真
(現地参加+リモート参加の皆様)



第35回肝類洞壁細胞研究会に参加して

順天堂大学大学院医学研究科 消化器内科学
教授・消化器内科チェアパーソン 池嶋 健一

第35回肝類洞壁細胞研究会は、新潟大学教授の寺井崇二会長のもと、令和3年12月16日(木)～17日(金)に新潟コンベンションセンター(朱鷺メッセ)で開催された。前年の令和2年からコロナ禍に見舞われて、学会・研究会の現地開催が困難を極める中、ハイブリッド開催ではあるものの、不肖私も含めて会場に足を運ばれた一部の世話人や会員の先生方とは、対面でのコミュニケーションを図ることも出来、久々の楽しいひと時を過ごさせて頂いた。私自身は、本研究会の創設当初からの久留米での開催にはあいにく参加する機会がなく、初めて久留米から離れて開催された1998年の新潟が本会へのデビューであったことを、懐かし

く思い起こした。確か、その折は新潟大学構内の有王記念館での開催であったが、米国留学から帰国早々、意気揚々と発表に臨んだものの、厳しい質問攻めの洗礼を受けたのも、今となっては古き良き思い出の一ページである。

さて、今回の研究会であるが、相変わらず参加各施設から興味深い演題が寄せられ、コロナ禍の最中でも類洞壁細胞研究がそれぞれ着実に進められていることに、まずは安堵するとともに、身の引き締まる思いであった。仕事が捗らないのを、「コロナだから仕方ない」などと、とにかく責任転嫁しがちなことを反省させられる。やはり、こうした研究会で切磋琢磨することこそが、明日への原動力に



なるということ、改めて感じさせられた。また、寺井会長の肝煎りで、新潟大学の基礎系教授陣がそれぞれの研究手法を披露され、類洞壁細胞研究への新しい視点や今後の課題を提示して頂いたことも、特筆に値する。私もその一つである技術紹介セッションの司会を務めさせて貰った。お一方は顕微解剖学教授の芝田晋介先生で、神経回路の「コネクトミクス」研究という新領域に関連したイメージング手法の最先端をお示し頂いた。類洞壁細胞研究も、古典的な形態学から超微形態の研究へと、その礎は形態観察に立脚しており、新しいイメージング手法の導入は私たちの領域でも非常に魅力的なアイデアである。また、薬理学分野教授の平島正則先生には、リンパ管形成のメカニズムとその制御因子に関するご研究についてご発表頂いた。肝類洞壁構造のユニークな点は類洞内皮細胞と肝細胞の間にDisse腔が存在することであるが、Disse腔の液性成分は組織間液としてリンパ流へと繋がっている。しかしながら、肝臓のリンパ系についてはこれまで案外と知見に乏しかったと言えよう。最近イエール大学の岩切泰子先生のグルー

プが素晴らしい研究を展開され、俄かに研究トピックスの一つとなっている。お二方のご講演だけをとっても、まさに肝類洞壁細胞研究に直結する最新の研究動向を討議出来る素晴らしい企画であった。

昨年は1年遅れの東京オリンピックが開催され、わが国の“おもてなし”の精神が世界に向けて発信されたのも記憶に新しいが、本会では寺井会長ならではの心からの“おもてなし”を、学術プログラムからランチョンのお弁当に至るまで(これはWeb参加の先生方には甚だ恐縮ではあるが)、堪能させて頂いた。2022年は12月9日～10日に奈良医大の吉治仁志教授が会長を務められることになっており、学術面はもとより、久しぶりに古都奈良を訪れるのが今から楽しみである。そして、今回の世話人会で、翌2023年の本会を私共が主催させて頂くことになった。さて、5年ぶりの東京開催をどうしたものか、将来へのビジョンを存分に討議出来るような会にするべく、皆様の一層のお力添えを頼りにするばかりである。



研究会終了後、代表世話人河田則文教授、当番会長寺井崇二教授
および新潟大学スタッフの方々と

第35回肝類洞壁細胞研究会に参加して

大阪大学大学院医学系研究科

学内講師 疋田 隼人

第35回肝類洞壁細胞研究会はハイブリット形式での開催でしたが、新型コロナウイルス感染症も第5波と第6波のちょうど狭間であったこともあり、新潟の朱鷺メッセに赴き参加しました。コロナの影響で、なかなか他の施設の先生方と直接お会いする機会が少なかったのですが、本研究会に現地参加しておられた先生方と久しぶりに情報交換や研究のご相談ができ、大変貴重な機会となりました。会場は座席間隔も十分距離がとられており、安心して研究会を満喫することができました。

本研究会では、若手研究者セッション基調講演として発表の機会をいただきました。その中で少しお話しさせていただきましたが、私自身は肝細胞死制御機構を解明することから基礎研究を開始しました。しかし肝臓という臓器における肝細胞死の影響を研究するうちに、自然と研究対象は肝細胞から肝類洞壁細胞へと広がっていきました。現在は解析技術の進歩により、生体における細胞間相互作用研究はますます活発になってきております。これまでは肝細胞という側面からの解析が多かった肝臓の発生、再生、発癌なども、肝類洞壁細胞との細胞間相互作用の重要性が次々と明らかになってきています。肝臓という臓器を研究対象にする上では、もはや肝類洞壁細胞研究は必須であり、肝類洞壁細胞研究は今後ますます発展することが期待されている研究分野と考えます。この若

手研究者セッションでは、9名の若手研究者の先生方がご発表され、今後の研究会の発展を確信させるレベルの高い研究を拝聴することができました。本セッションをご企画いただきました会長の寺井先生には厚く御礼申し上げます。

また、今回の研究会では技術紹介セッションとして、イメージング技術やプロテオミクス、リンパ管形成やマイトファジーについて、新潟大学の著明な先生方から最新の技術や研究についてご紹介いただきました。いずれのご講演も講演内容の大部分は直接肝臓の研究とは関係ありませんが、肝類洞壁研究に応用できるご講演であり、大変興味深く拝聴しました。なかなか自分の分野以外の研究について、新しい知識を得る機会が少なくなってきたおり(「得る努力が少なくなってきたおり」の方が正確かもしれません)、ずぼらな私にとって、研究の幅を広げるためにはこのような講演は大変ありがたかったです。その他一般演題だけでなく、ご高名な先生方のご講演もたくさん拝聴でき、あっという間の2日間の研究会でした。

現地参加した者しか感じられなかったものとして、一番印象深かったのはお弁当やスイーツの内容でした。初日のランチョン、イブニング、2日目のモーニング、ランチョンの各セミナーのお弁当では、“新潟の美味しいもの”を網羅する献立になっていました。また、スイーツセミナーでは、非常に多くの種類の新潟の名菓子を少しずついただくことができ、研究会会場にしながら新潟の食文化も余すことなく味わうことができました。内容については、寺井先生を始め医局員の先生がかなり吟味されたのではないかと思います。おかげさまで知識だけでなく、お腹も満たされた研究会でした。個人的には、帰りは吹雪で飛行機が欠航となりましたが初めて上越新幹線に乗ることができ、私にとっては最後まで思い出深い研究会となりました。ご準備くださいました会長の寺井先生を始め、医局員の先生方のご尽力に心から感謝申し上げます。



「若手研究者セッション」のようす

第35回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加して

大阪公立大学大学院医学研究科 機能細胞形態学講座

助教 湯浅 秀人

大阪公立大学(旧大阪私立大学)の湯浅と申します。この度、第35回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加させていただきました。初めに本会では若手研究者セッションにおいて発表させていただきました、有難いことに最優秀賞を頂くことが出来ました。常日頃のご支援およびこのような発表の機会を与えてくださいました大阪市立大学医学研究科の池田一雄先生、松原勤先生および宇留島隼人先生、並びに、本会の当番世話人を務めていただきました寺井崇二先生とスタッフの方々、そして選考下さいました先生方に心より御礼申し上げたいと思います。

さて私の新潟の旅は大阪発の新幹線による長旅から始まりました。発表の日程上、前日入りする必要のあることから、景色を楽しみに約5時間電車で揺られつつ新潟まで向かいました。新潟駅に到着後、同教室の宇留島先生と共に晩御飯に向我わせて頂きました。本会中にも寺井先生がおっしゃられておりましたが、新潟は本当に食べるもの食べるもの全てが美味しく、好き嫌いが多い私が生まれて初めてイクラを美味しいと感じることが出来ました。また二人ともお酒が好きなため、いつもは食べて飲んでとすることも多いのですが、今回はこの情勢に加え、二人とも翌日に発表も控えているため、お酒は控えてホテルに向かいました。しかしながらホテルでの別れ際、宇留島先生の手にはいつのまにかビールが握られていました。

翌日、会場では多くの先生方がコロナ以前と同様に現地に足を運び、発表や討論を行っている姿が見受けられました。発表も基礎的なものから臨床的なものまで幅広く、様々な勉強をさせていただきました。その中でも本会では電子顕微鏡についてのご講演が多かったことが印象的でした。和氣健二郎先生による肝星細胞についてのこれまでの形態的知見、および新潟大学の芝田晋介先生

による電子顕微鏡を用いた最新の解析技法や立体構築といったお話には非常に感銘を受けました。私自身、電子顕微鏡を研究に用いているため、先生方のご講演を拝聴できたことは非常に勉強になるとともに、やはり電子顕微鏡を扱うものとして先生方のように見る人を虜にするような美しい写真を撮らなければと再認識させられました。また芝田先生とはご講演後にも、研究や教育についてのお話をさせていただき、非常に楽しく有意義な時間を過ごさせていただきました。このようなお話は間違いなくオンラインでは出来なかったことだと思います。対面での学会の貴重さ、楽しさを再確認させていただきました。

私自身にとって本会は賞を頂き、多くの先生方と意見を交わすことが出来、非常に充実した学会となりました。唯一惜しむべき点は新潟に降り立ちながら好物である日本酒をほとんど味わうことが出来なかったことでしょうか。本稿を執筆させていただいている2022年2月に於きましては、まだまだコロナの第6波が猛威を奮っております。そのため依然として集会や飲食には制限がかかることもしばしばです。次回の肝類洞壁細胞研究会の際には、コロナなんて過去のことだと気にも留めず、肝類洞壁研究の大先輩であられる先生方とお酒を片手に意見を交わすことが出来るような情勢になっていれればと願います。まだまだ厳しい情勢ではあると思いますが、皆様方及び皆様のご家族様方のご健康を、心よりお祈り申し上げます。



朱鷺メッセの展望台からの景色



第35回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加して

大阪公立大学大学院医学研究科 肝胆膵病態内科学

大学院生 翁 良徳

大阪公立大学(旧大阪私立大学)大学院医学研究科 肝胆膵病態内科学の翁良徳と申します。今回、新潟大学大学院医歯学総合研究科 消化器内科学分野 寺井 崇二教授が主催されました第35回肝類洞壁細胞研究会学術集会に参加させていただきました。

第1日目、私は若手研究者セッションにおいて肝細胞と肝星細胞の細胞間相互作用の側面から現在、投稿準備をしている論文内容を発表しました。また技術紹介セッションでは、芝田晋介先生(新潟大学)がご講演された最先端のイメージング手法を拝聴し大変感銘を受けました。

第2日目、神吉智丈先生(新潟大学)がマイトファジーの分子機構と生理機能についてご講演されました。『スタッフも含めて、ここまでマイトファジーの研究を行える環境が整っている研究室は他にない』と仰る通り研究成果は哺乳類のみならず酵母にまで至り、研究手法についても分かりやすく大変興味深いお話を拝聴しました。



朱鷺メッセ Belfcoばかうけ展望室から望む信濃川



翁 良徳 最優秀賞の授賞式にて